

「白娘子」と「化け鱧」

——中国江南の伝説と日本の海幸山幸神話——

大林 太良

一 はじめに

日本古代神話の比較研究に当って、今まであまり省られていなかった資料として、中国、ことに漢民族の現代の伝説や昔話がある。

これは大変重要な資料である。と言うのは、第一に、中国には古代神話は断片的にしか、かつ多くは歴史化したりして変形した形でしか知られていないため、それだけに現代の民間伝承のもつ重要性は大きい。第二に、中国でも東海岸、ことに江蘇、浙江の地は、日本列島への距離も短く、多くの交流が存在していた地域であるから、この地域の伝承に、大いに注目する必要があるからである。

私は、この立場から、江浙の地域の民話と日本の古代神話との比較に着手し、一九八四年秋の本学会例会で発表をおこなった。その一部はすでに他誌に公けにしたので（大林、一九八五）、ここでは残りの部分について論ずることにしたい。

ところで、現代になってから採集記録された中国の伝承を比較資

料として用いる場合、そこにはいろいろの問題がある。

第一に、口承文芸と文字文芸との交流という問題がある。これとある程度重複するが、非専門家の庶民の伝承と、芸能専門家の伝承との交流がある。つまり、中国においては、民間に口承で伝えられる伝説、昔話（Aと呼んでおこう）と並んで、それが専門の芸能人によって加工されて（A'と呼ぼう）、芝居の台本となり、また講師（説書師）や琵琶語り師（蘇州の彈詞）によって上演されるものが少くない。そして、民間伝承が、これら芸能のもとになるばかりでなく、逆にこれら芸能が民間伝承にもしばしば影響を及ぼすのである。つまり交流は一方的ではなく、相互的なのである。

このような場合、芸能の出しものと同じ主題の口承伝承をとり上げる場合、どこまでそれが、その土地の伝承といえるか、という問題が生じてくる。これは個別的な事例に則して詳しく吟味しなくてはならない問題である。しかし、一般論として言えることは、文字文芸あるいは芸能専門家からの影響を受けつつも、口承文芸（A）には、文字版や芸能版（A'）とは異なる節や要素を大なり小なり含

んでいるのが普通である。ここに、地方の本来の伝承が現われている、と一応仮定することができよう。私が、イザナキ・イザナミ神話との比較に用いた江蘇省雲台山の三官伝説は、たしかに『西遊記』第九回の玄奘法師の出生をめぐる話の影響をうけている、というより、むしろ、それをいわば大枠として利用している。それにも拘らず、三官伝説には、『西遊記』には欠けている、あるいは相違する多くの細部をもっており、しかも、それらがまさに日本神話に大きな類似を示しているのであった（大林、一九八五）。

話を方法論にもどすと、次に、同地域の、これとは一見別の話型と思われる伝承（B）、ことに文字版や芸能版にまとめられることもなく、したがってそれらからの影響も考えにくい伝承を、さきの伝承（A）と比較してみても、そこに共通性が見出された場合、この共通部分は、その地域の伝承と称してもよいであろう。私は三官伝説の論考においては、適当な資料を見出せなかつたので、この種の検討を行なうことができなかったが、浙江の白娘子伝説をとりあつかう本稿では、それを別の伝説、つまり「化け鱈」と比較し、このような手続きを試みることにしたい。

二 白娘子

浙江省杭州の西湖を舞台とした白蛇と許仙についての伝承は、南宋の紹興年間にさかのぼると言われ、繰り返して文学作品に加工され、清の乾隆年間になった小説『雷峰塔奇伝』などにおいて、ほぼ今日伝えられている形になった。また弾詞の『義妖伝』としても語られ、

さらにこのロマンスに題材をとった戯曲も多い（青木、一九七〇、八二―八七、羅、一九八一、王、一九八四、徐州、一九八三、三三九―三四〇）。そして、南宋の『西湖三塔記』や明の『白娘子永鎮雷峰塔』では、まだ今日の形式とはかなり違っていて、私の知る限りでは、日本の海幸山幸神話ないし豊玉姫神話との類似は見られないようである。日本の神話に似た筋をもつのは、清代以後の形式であり、ことに近年『西湖民間故事』にのったものである。後者に關しては、羅永麟は、原伝説の本来の面目と精神をよく保存していないのが惜しまれると評しているが（羅、一九八一、七五）、どこまで整理の手が加えられたかはともかくとして、やはり浙江・江蘇の伝承を基礎にしていることは間違いないであろう。

まず話の粗筋を紹介しよう。

陽春三月三日に、上八洞の神仙呂洞賓が老人に姿を変えて西湖の人ごみの中に来た。彼が売る団子を食べた少年は、三日三晩何も食べないので、父は心配して呂洞賓のところに連れて行く。呂は子供の足をつかんで逆づりにして、団子を吐き出させた。団子は西湖に落ちた。

このとき、断桥の下に一匹の白蛇がいて五百年間も神仙になるべく修行中だったが、この団子を飲みこんだため、さらに五百年分の修行がつけ加わったことになり、蛇は人間に変身し、白娘子と名乗った。

西王母の誕生日にすべての神仙は、蟠桃会に赴いた。白娘子もこれに出席し、帰りに南極仙翁から、団子を吐き出した子供がも

う立派な若者になっていると聞き出した。

天から西湖に下った白娘子は、小青蛇を救ったところ、この青蛇も人間に化し、小青と名のり、白娘子を姉と仰ぐことになった。そして清明節の日、木にのぼって見せ物を見物していた男が、例の若者と知り、西湖の舟の上で、この若者許仙と出あい、二人は恋に陥て、数日後結婚した。

許仙は鎮江で薬局を営んでいたが、五月の端午のときになり、妻に賽竜船を見に行こうと誘ったが、妻は実は妊娠しているからと打ち明けて、これを断る。許仙は、今日は端午だし、また妊婦の身体にいいからと言って、白娘子が厭がるのに、無理に雄黄酒を飲ませた。

彼女は気分が悪くなり、ベッドに上った。訳のわからぬ許仙は、あとを追って行き、カーテンをあけてみると、妻の姿はなく、一匹の白蛇がそこにいた。夫は気絶した。

小青が帰って来て許仙が倒れているのを見、眠る白娘子を起した。白娘子は、夫がまだ完全には死んでいないことを知り、崑崙山から靈芝仙草を盗み、もどって煎じて夫にのませ、生きかえらせた。妻が白蛇だと知る夫は妻を恐れていたが、白娘子は、小青と口を合わせて夫をうまくだまし、あれは勘ちが良かったと思わせる。

西天の仏蓮座の下に烏龜がいたが、これは元来は西湖で白蛇にやっつけられて逃げて来たものだった。烏龜はある日、金鉢、袈裟と青竜禅杖の三宝を盗んで現世に逃げて来、人間の僧に変身し、法海と名乗った。彼は鎮江の金山寺にやって来たが、ここが氣に

入ったので、先住の住職を殺してそれに化けた。しかし参詣にくる信者が少いので、疫病を流行らせて鎮江の人々がお詣りになるようにさせようとしたが、許仙の保和堂でつくって売る辟瘟丹とか駆疫散のために、うまく行かない。そこで邪魔ものを片づけようと保和堂にやって来て、白娘子を見て白蛇の変身だとさっとた。彼は許仙に七月十五日に金山寺に盂藍盆会に来るように言っただち去った。

許仙は妻と一緒に金山寺に行こうと思ったが、妻は身重だからと言って断った。許仙が一人で赴くと、法海から、妻が白蛇だと言われた。しかし彼は妻への愛情から家にもどろうとし、法海の弟子になることを承知しなかつたので、法海によって閉じこめられてしまった。

夫が帰らないので、白娘子は小青と一緒に金山寺に行つて法海に会った。法海が夫を釈放せぬばかりか、青竜杖で彼女を打つに及び、白娘子と小青は麓に退却した。白娘子は金の簪をとり、空中にふると、水浪の刺繍のついた小令旗となり、これを頭上で三度前に振ると大波がわき上り、エビの兵士、蟹の將軍の大軍が金山寺に向つて押しよせて行つた。しかし、法海は袈裟で長堤を作つて洪水を防ぎ、白娘子はついに彼を負かすことができなかつた。そこで彼女は、洪水と軍勢を引っこめ、西湖にもどつて自らを鍊え、報復の機をまつことにした。

とかくするうちに許仙が金山寺からすきを見て脱走し、保和薬局にもどつてみると、白娘子も小青も不在だった。そこで法海を怖れる彼は鎮江にとどまらず杭州に行つた。夫妻は西湖の断桥で

再会し、許仙の姉の家に落ちつき、正月をすぎし、元宵節の日に白娘子は男の子を産んだ。子供が生まれて一ヶ月たち、許仙の家で湯餅会や満月酒を祝う日に、法海は物売りに扮して金鳳冠を売りに来た。許仙がこれを妻に買い与え、白娘子がかぶったところ、頭をしめつけられて気絶して床に倒れた。法海はこの冠をもとの金鉢の形にもどし、この鉢の光のなかに白娘子を入れた。息子をのこして白娘子は白蛇の形で金鉢にとじこめられ、法海はこれを南屏山淨慈寺前の雷峰の上の雷峰塔の下に埋めた。

小青は修業をつんで再び法海に闘いをいどみ、小青が剣を揮うと雷峰塔は崩壊して、白娘子がとび出して来て闘いに加わった。逃げる法海は西湖に落ちた。これを見た白娘子は金の簪をとって令旗とし、頭上で後方に三度振ると湖水が乾上って来た。法海は身を隠そうとして、蟹の腹の下の縫い目にもぐり込む。こうして法海和尚は蟹の腹のなかに閉じ込められ、もう出れなくなった。元来、蟹はまっすぐ歩いたのであるが、腹のなかに横行霸道の法海が入ってからは、もう真直ぐ歩けず横ばいするようになった。今でも蟹の殻をはぐと、中に禿頭の和尚がいるが、これが法海である(杭州市、一九八三、一三一—三四、Walls, 1980, 43—65)。

この白娘子伝説は、長い年月の間に豊かに成長し、彫琢を加え磨き上げられた傑作である。この白娘子伝説が、どこまで文芸作品なしいし芸能専門家からの影響をうけているか、また個々の構成要素が、いかなる民間伝承に由来しているかは、詳しい研究を必要とする問題であるが、私はその任ではない。しかし、ここでは敢て推測を試

みることにしたい。

実はこの白娘子伝説は、奇妙なことに、日本の海幸山幸神話と大きな類似を示しているのである。対照表によってこれを説明したい。海幸山幸神話は周知の話だから、あらためて筋を紹介することなしに比較に進むことにしよう。

海 幸 山 幸

白 娘 子

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 男が釣針を水中の魚にのみこまれる ② この魚を支配する女が男の妻となる ③ 妻は妊娠する ④ 男は呪術的に水を出して敵を服従させる ⑤ 出産に当り男は妻の鱈の姿を見る ⑥ 男の子が生まれるがそれののこして母は去る | <ul style="list-style-type: none"> ① 少年の口から落ちた団子が水中の蛇にのみこまれる ② この蛇は少年の妻となる ③ 妻は妊娠する ④ 妊娠期間中に男は妻の蛇体を見る ⑤ 女は呪術的に水をおこすが、敵は敗れない ⑥ 男の子が生まれるがそれののこして母は去る |
|---|--|

つまり、4、5の順序が海幸山幸神話と白娘子伝説とは逆になっているが、その他においては、両者は同じ順序で話が進行しているのである。もちろん、個々の項目においては、ある程度の相違はあり、たとえば、②では白娘子では団子をのみ込んだ蛇が団子を落した少年と結婚するのに対し、海幸山幸神話では山幸彦は釣針をの

みこんだ鯛ではなくて、その支配者たる豊玉姫と結婚するのである。また⑥は兩者ともに、男の子が生まれるがそれをのこして母が去るというように、抽象化すれば同一であるが、日本神話では妻の去ったことは海陸分離を意味しているのに対して、白娘子においてはそのような意味は含まれていない。このような相違にも拘らず、これら二つの話の基本的な筋の類似に注目すべきものがある。

このような類似を示す白娘子伝説は、文人や芸能人が勝手にデッチ上げられたものでなく、浙江・江蘇地方の民間伝承をもとにしていると思われる。そのことを示しているのは、次の「化け鯰」伝説との比較である。

三 化 け 鯰

林蘭編『一本脚の子供』（一九三二、七一〇）にのった「化け鯰」は、豊玉姫型の話で、何公超が浙江新市で採集したものである。そしてこれは白娘子とは異なり、文芸化や芸能化されずに、民間で伝えられてきたもののように見える。

一人の乞食が橋の上を行くとき、橋の精霊たちが、明日、仙人がここを行くと話し合っているのを聞く。翌日、乞食が待っていると、一人のびっこの乞食がやって来た。これこそ八仙の一人の李鉄拐と思い、私を救って下さいと乞う。仙人は、足の膿に汚物を混ぜて団子をつくり、これを飲ませるが、乞食はこれを結局吐き出してしまい、橋から水中に落ちてしまい、それを一匹の鯰

（娘魚）がのみこんだ。

河のなかの鯰は仙人から授かった団子をのみ込んだため、妖精となり、人間に化けることができるようになった。

数年後、一人の役人とその妻が、船に乗ってこの河を通りかかったが、妻はうっかりして金の腕輪を河に落した。しかし、誰もこの腕輪を拾い上げられないので、役人はみずから水底に潜ったところ、鯰の精がすぐ彼を食べてしまい、彼の形に変わって、その腕輪をもって水面に出て来た。

鯰の精は役人に化け、昼は役所で事務を執り、夜は妻と夫婦生活を送った。一切変りがないが、妻は彼の身体が不思議に冷いこと、夜になると、いつも大桶いくつもの水を汲ませ、自分で中に潜って行水し、しかも嚴重に室を閉ざし、人には覗かれないようにしてこれを行なうのを奇怪に思った。ある日、彼女は夫が行水中、簪で入口の隙間をこじり、なかを覗くと、大きな鯰が水桶のなかを泳ぎまわっていた。

張天師を頼んで調伏してもらった。張天師が頭上の簪をとって魚の頭に挿すと、もう人形に化けることはできなくなった。その後、鯰は、いつになつたらまた人間の姿になれるかと問うた。張天師は、この辺で誰か夜に拍子木で五更をうったら、そのときはじめて人間の姿に復することができると答えた。これ以来、新市地方では、毎晩四更（午前十一三時）を打っただけで、これまで五更を打つたことがない（沢田、一九七五、一〇六一—一〇九）。

一見して明らかのように、これは白娘子とは全く別の話である。

それにも拘らず、両者は大幅な筋の共通性をもっている。

白娘子

①仙人の団子をのみ込んだ子

供がこれを吐き出す

②それをのみ込んだ白蛇は人

間の女になる

③女は、さきに吐き出した子

供―若者と結婚し

④女は端午の日、雄黄酒をの

み蛇体となる

⑤夫はこれを見て気絶

⑥僧法海が白娘子を雷峰塔の

下にとじ込める

⑥においても明瞭なように、白娘子伝説には仏教の色彩が濃厚なのに反し、化け鯀では道教とのつながりが見られる。③を見ると、白娘子では蛇女は男と結婚するが、化け鯀では、女はすでに結婚しているの、鯀男は一たん女の夫を殺してから、その後釜になる、というように複雑化している。

このような相違はあっても、白娘子と化け鯀の間の基本的類似は動かない。そして化け鯀は、文芸化、芸能化されなかつた(あるい

化け鯀

①仙人の汚物をのみ込んだ男

がこれを吐き出す

②それをのみ込んだ鯀は人間

の男になる

③ある女は腕輪を水中に落とし、

その夫を殺した鯀男はその

女と結婚(複雑化)

④男は毎日、密室で鯀となつ

て水浴

⑤妻はこれを見て始末するこ

とを考える

⑥道教の張天師が鯀男を調伏

は少くとも、あまりされなかつた)民間の伝説である。してみると、あの波瀾万丈の白娘子伝説も、その基礎には浙江の民間伝承があると結論してもよからう。

ところで、白娘子伝説は上にも見たように、日本の海幸山幸神話とも大きな類似を示していた。それでは化け鯀もまた海幸山幸神話と共通要素をもっているであろうか? 然り、化け鯀は、次の対照表が示すように、一連の要素とその継起関係を海幸山幸神話と共有しているのである。

海幸山幸

①弟は兄の釣針を失う

②弟は海中に釣針を探しに行

く

③弟は海神の女と知ってい

て、女と結婚

④弟は釣針をとりもどす

⑤妻は未完成の産屋に入り、

夫に見るなと禁ず

⑥夫がタブーを破ってみる

と、妻は鰐になつてい

⑦夫婦別離―妻は海宮に帰る

化け鯀

①妻は自分の腕輪を失う

②夫は河中に腕輪を探しに行

く

③夫は腕輪をとりもどさず、

鯀に食われ、鯀が腕輪をも

たらす(複雑化)

④妻は鯀と知らずに、これと

夫婦生活をおくる

⑤夫は密閉した浴室に入り、

妻に見るなと禁ず

⑥妻がタブーを破つてみると、

夫は鯀になつてい

⑦夫婦別離―夫は調伏されて人形に復せず

この場合、③と④は、海幸山幸と化け鯨とでは順序が逆転している。また、海幸山幸神話は、白娘子の場合と同様、夫は人間で女が異類であるのに反し、化け鯨では、女が人間、夫が異類である。このような相違にも拘らず、化け鯨もまた海幸山幸神話の興味深い類話であることには変りはない。

四 おわりに

このように白娘子、化け鯨ともに海幸山幸神話と共通している面がある。ことに、

- (a) 人間が水中に物を落す（あるいは失う）
- (b) 水中の動物がこれを自分のものにする
- (c) この動物は人間と結婚する
- (d) 動物は自分の姿を見ることを配偶者に禁ずる
- (e) 配偶者はそのタブーを破る
- (f) 夫婦は別れる

という一連の要素は、これら三つの話に共通している。私は、これを江南から日本にかけてかつて分布していた一つの古い神話の主な筋であるという解釈を、ここで一つの仮説として提案したい。その当否は、今後一層多くの資料によって検討されるべきであろう。

ところで、私がここで試みた比較から見ると、これら浙江の伝説は、我が海幸山幸神話の構成についても貴重な示唆を与えているように思われる。つまり、海幸山幸神話は、(一)インドネシアに典型的

な類話を多くもつ、失われた釣針型の話、(二)海と陸(山)の対立によって洪水が生じるという伝承——江南からベトナムにかけて分布——、(三)異類の女と結婚したが、見るなのタブーを破ったので夫婦は別れたというメリュジーヌ型ないし豊玉姫型の話——中国、朝鮮にも類話あり——という、三つの構成部分から成っている(大林、一九七四、九三—一〇四)。しかし、これらの構成要素が、果して日本で結合したのか、それとも、すでに海外で結合した形をとってから日本に入ったのか、明瞭でなかった。

ところが、いま私が挙げた三説話の共通要素をみると、(a)(b)(c)失われた釣針型、(d)～(f)は(三)メリュジーヌ型ないし豊玉姫型の話である。したがって、少くともこの二つの型は、すでに江南で結合してから日本に入った可能性が、以前よりも高まったと言いうことができよう。さらに、三説話の共通要素中には入っていないが、白娘子の話では、呪術的な方法で水をおこして敵を攻める条があった。これは、より正確に言うと、金山寺の山上にいる法海を攻めるために水精たる白娘子が大水をおこしたのである。言いかえれば、これもまた水界と陸界の対立によって洪水が生じた話なのである。この洪水モチーフ(二)もまた、すでに(一)や(三)と相伴って、江南から日本に入ってきた可能性もまた除外できない。

中国の現代の民話は、このように、日本古代神話の研究に、新しい見通しと、またそれとともに新しい問題を提出しているのである。

【引用文献】

青木正児、一九七〇『江南の春』《青木正児全集》第七巻所収、

春秋社)。

徐州師範學院中文系《簡明中國古典文學辭典》編寫組、一九八三『簡明中國古典文學辭典』江西人民出版社、南昌。

杭州市文化局編、一九八三『西湖民間故事』浙江文芸出版社、杭州。

王驥(著)、綿丸篤子(訳)「白蛇伝々説の起源を探る」『世界口承文芸研究』第五号、東洋編、三三一—五〇、大阪外大口承文芸研究会。

大林太良(編)『日向神話』(シンポジウム日本の神話4)、学生社。

——一九八五「日本神話と中国の民話——イザナキ・イザナミ神話をめぐって——」『ユリイカ』一七卷一号、七六—八〇。

羅永麟、一九八一「論《白蛇伝》」『民間文芸集刊』一、七四—九九、上海文芸出版社。

林蘭、一九三二『独脚孩子』(民間童話集之一)、北新書局、上海。

沢田瑞穂(訳)、一九七五『中国の昔話』(世界民間文芸叢書第一卷)、三弥井書店。

Walls, Jan and Ivonne (trans.) 1980. West Lake: A Collection of Folktales. Joint Publishing Co., Hong Kong.

(おおはやし・たりよう／東京大学)